



え・古屋智子

なぜ形に 表わすのか

「ありがとう」という謝意を形で伝えるには、どのようにすればよいか、考えてみましょう。

たとえば、男性経営者が奥様に対する場合、単に「ありがとう」と発するだけでよいのでしょうか。たしかに言葉という形ではありませんが、肝心なのは、思いが相手に伝わったかどうかです。

「食事がおいしかった」「掃除が行き届いていて気持ちがいい」「家を守ってくれるから働ける」といった事柄への感謝は、もう一歩突っ込んだ形で表わしたいものです。

たとえば毎日、妻の肩を五分間揉んでやる、腰や足の裏を指圧してやる、日に一度、手紙（ラブレター）を書いて渡す、一日一本、花を買って帰る…などの工夫をすることで、思いもさらに伝わっていくものかもしれません。

「感謝できない」「恩返し的心が起きない」「身近過ぎる故、愛情があるのかわからない」といった方が、両親や配偶者に日に一度、葉書を出す実践を通して、思いを深められた体験も少なくありません。

次に、「私は〇〇さんを尊敬しています」といった心の内の敬意を形に表わすには、どのように努めればよいでしょうか。

それにはまず、相手をよく知り、よく見て真似ることです。そして、己の我を捨て去り、対象者に没入する（一体となる）が如くに頭を下げることです。

江戸時代の医師で国学者の平田篤胤（あつたね）が神様を拝む時には、如何にもそこにおられると思わされるような敬虔な姿であった、といえます。そして、第三者（周囲）にも、その内面が伝わった（波及した）というのです（丸山敏雄著『純粹倫理原論』）。

このように形を尊重することは、生活にけじめをつけることに結びつきます。目に見えない神仏や祖先の御霊に、拝礼、挨拶、頭を垂しみがわき、謙虚になり、豊かな心が涵養されるのです。

墓参という形についても同じことがいえます。倫理研究所会長・丸山竹秋は、墓参りをきちんと行

なう人の仕事や家庭は比較的うまくいっていることに触れ、その理由をこう述べています。

墓を大事にするということは、親祖先を大切にすることと、同じことであるからであります。親祖先を大切にし、そのおかげを思つたということは、自分自身の生命を感謝し、生命をより充実させることにはかなりません。

（丸山竹秋著『ここに倫理がある』）
自分の肉体、精神は、親祖先の肉体精神、つまり生命が積み重なったものにほかならない。だから墓を大事にする（墓参をする）ことは、わが心をひきしめ、自分の生命の靱帯に油をさすような働きになるのです。

遠方に墓があるような場合、実際には、年に一度の墓参りもなかなか難しいものです。そうした場合は、親類か、誰か然るべき人に墓のことを頼んで、その人に玉串料や線香代、花代をことづけるのは大変ゆかしいことです。月に一度は、親祖先との心の交流を形に表わしていきたいものです。